

# 備陽史探訪

第81号

会 行 探 訪  
史 陽 備  
福 山 市 多 治 米 町 5-19-8  
TEL. (0849) 53-6157

## 三角縁神獸鏡

田口 義之

今年は、新年早々、奈良県の黒塚古墳から三十二面の「三角縁神獸鏡」が出土したとして、新聞の紙面が騒がしい。

私がこのニュースを知ったのは新聞発表があった二日前の一月八日のことだ。某紙の記者が晩に電話をかけてきて、奈良天理の黒塚古墳から三角縁神獸鏡が三二面も出土した、ついでに感想を聞かせて頂ける方を紹介してほしい、福山支局は女性が当たった、というのだ。さっそく当会の古代史に関心のある女性会員を紹介したが、私もこの知らせには驚いた。なにしろ「三二枚」である。それも今まで出土しないと言われていた大和の中心地で出土したのである。

三角縁神獸鏡の名前を初めて聞いた(見た)のは高校の頃のことだ。当時、歴史に関心を持つようになった私は、乏しい小遣いで文英堂の国民の歴

史第二巻「女王国の出現」を手に入

れ、この本の中で初めて「三角縁神獸鏡」の文字を読み、それが邪馬台国の女王卑弥呼が魏の皇帝より下賜された「銅鏡百枚」に比定されていることを知ったのである。著者は有名な小林行雄氏で、同氏が初めて今日定説と化している「同範鏡理論」を発表したのがこの本だと言うのだから奇妙な縁である。

さて、この小林理論であるが、初めて読んだときから一つだけ腑に落ちない点があった。小林氏によれば魏の明帝から下賜された同鏡百枚は「国中に示す」ため、卑弥呼から各地の首長に送られたが、この鏡はそのまま首長と共に葬られたのではなく、数世代「伝世」した後、古墳時代の始まりと共に古墳に埋められたと言う、いわゆる「伝世鏡理論」である。私はこの理論を初めて読んだ時、不思議な気持ちにとらわれた。「なぜ直接に与えられた首長と共に埋葬されなかったのか」「なぜ数世代伝世される必要があったのか……」

今から振り返ってみると、小林先生もここが一番苦しい点ではなかったかと思う。「同範鏡理論」が発表された頃、古墳時代の始まりは四世紀初頭と考えられていた。卑弥呼が銅鏡百枚を手に入れたのは、西暦二百三十九年のことである。この間、六十年の歲月が経過している。この期間をどう考えるか。小林先生は、これを首長が自己の権威を主張するため鏡を持つ伝えた期間と考えた。小林先生は古墳時代の始まりを大和朝廷の成立と同時に考えられていた。つまり、朝廷に服属した各地の首長達は、その権威を大和の大王によって保証されることとなり、権威の象徴としての意味を失った鏡はその首長の死と共に古墳に埋められたと言うのだ。

しかし、この問題は古墳時代の開始をより古く設定すれば解決の付く問題であった。そして、この疑問は次第に解消しつつある。大阪府の池上菅根遺跡で発見された柱根の年輪測定による実年代の確定は、この傾向に拍車をかけた。今まで西暦一世紀と考えられていた弥生中期の実年代が西暦紀元前後と確定したのである。これで弥生中期の実年代は一気に百年ほど古くなった。これに連動して古墳時代の実年代がさかのぼるのは理の当然であろう。

現在、古墳時代の開幕を遅くともえる学者はまだ多い。しかし、この問題は年輪測定法などの進歩によって決着が付くと見ている。「卑弥呼の墓」が「古墳」と断定できる時期が、すぐそこまで迫っている。

一月十四・十五日の両日、この黒塚古墳の現地説明会が発掘担当者によって催された。私も十五日の早朝福山を発つてこの「現説」に駆けつけた。当日はあいにくの雨模様であったが、さすがに人々の関心は高く午前八時三十分には現場に到着したときには既に長蛇の列であった。待つこと一時間、私もこの「世紀の大発見」の現場を目にした。わずかに数分ではあったが、鈍く青色に光る鏡と生々しい朱の赤色を臉に焼き付けることが出来た。

そして、そこで年来の疑問に終止符を打つことができたのである。報道の通り「三角縁神獸鏡」は棺内ではなく、死者を守るようにまわりに立て並べられていた。「伝世」されるほどの貴重な鏡なら、されようのない「扱」方であった。「この鏡は伝世されたものではない、これが率直な私の感想である。しかし、一方、新たな疑問が沸いてくるのも事実である。果たして、三角縁神獸鏡は卑弥呼が魏の皇帝から下賜された「銅鏡百枚」に当たるといえるのか、今後の展開に期待したい。

## 出雲、石見

## 一泊旅行の思いで

小島 袈袞春

## 【神原神社古墳】

私が初めてこの古墳を見学に来たのは昭和五十九年の事だった。

三角縁神獸鏡に付いては、当時は未だ「魏志倭人の条」に記載された倭の女王卑弥呼が魏の皇帝から下賜された「銅鏡」との見解が多数であつて、特に「景初三年」と、女王卑弥呼が魏の皇帝に遣使した紀元二

三八年を示す三角縁神獸鏡が、この古墳から出土した事はその説を補強し、併せて同鏡が圧倒的に出土している大和が「魏志」に記載された「邪馬台国」との、所謂「卑弥呼大和説」の重要なポイントだったのであつた。

此の紀年銘が記された「三角縁神獸鏡」は昭和四十七年の調査で発見された。然しその後「邪馬台国」論争が盛んになるに連れて、三角縁神獸鏡に幾つかの疑問が出てきた。

其の一、出土数が三百枚を越えて卑弥呼に下賜された一百枚を大幅に上回る事。

其の二、現在時点で中国本土では三角縁神獸鏡は一面も出土していない事（但し「三角縁画像鏡」は紹興市付近で多数出ている。社会思想社

刊「鏡」より）。

又一九八一年以降から中国社会科学院考古研究所所長、王仲殊氏の論文が次々と発表され、三角縁神獸鏡に記された「銘文」の研究からこの銅鏡は三国時代の「呉の国」の工人達が何等かの理由で倭国（日本）に渡り作成したものであると結論し、日本の考古学会に一石を投じていることを忘れてはならない。

なお又前記した紹興市は江南の地方で三国時代の「呉の国」で有る事は右の説を補強して余りある。

しかし乍ら三角縁神獸鏡が紀元二三八年、女王卑弥呼が魏の皇帝から下賜された銅鏡とは異なるとしても三角縁神獸鏡が「邪馬台国」大和説補強する意義は変わらない、と私は堅く信じるので有るが、其の理由に付いては此処では控える。

さてこの様な思いを秘めての今回（平成九年）の「備陽史探訪の会」に依る再訪であつたが実は前回（昭和五十九年）訪ねた前の年に、近く

の荒神谷に於いて「銅剣三五八本」が発見されていて、私も勿論見学したのであるが、其の時歩いた山肌から後で「銅矛と銅鐸」が出土した、と知って「銅鐸を踏んでいたのか」と驚きを新たにしましたものであつた。

そして今回も又、昨年すぐ北の加

茂谷から「銅鐸三十九個」が一括出土しているのである。私は神原古墳の上に立つて次の宝物は何処から発見されるのかと、廻りの山々を眺め渡した事であつた。

## 【一畑薬師】

此の薬師様は目の病にあらたかな靈験が有ると世間に聞こえている。

私の家内も目は余り良くないので是非参拝してご利益に預かりたいと日頃考えていたのでご案内を頂いて誠に有難かつた。

頂いた資料に依れば、毛利元就も此の薬師を厚く信仰し、堂塔の修理や喜捨を惜しまなかつたと云う。勿論信仰と供に人気のある寺社と信頼関係を維持する事は、領国経営の重要な事項なのでもある。

## 【鰐淵寺】

天台宗の大寺院として古代は修驗道の道場。中世以降は僧兵を擁し、広大な寺領を保持して、出雲大社の別当寺となり又学問の府としての名声も高かつた浮浪山鰐淵寺。私もかねてから訪ねてみたい寺であつた。

有名な宝物は秋の曝涼の時に見学ができるとの事なので其の機会に又尋ねて見たいと思う。

米原正義著「尼子一族」に依れば尼子経久発願の「法華經千部誦誦」を富田城内にて行う「法会」の第一

座を富田城に近い清水寺と鰐淵寺が毎回のごとく争つたが、次第に清水寺を重視する尼子氏の姿勢に、晴久の代になつて間もなく、鰐淵寺は尼子氏を「見放した」とある。

毛利元就が鰐淵寺と深く結び付いた時期はその頃の事であろうか。機敏な元就は同寺と出雲大社を味方に付けた。それが後々まで出雲の国の経営に役立つ事になったのである。

## 【小早川正平の墓（八騎塚）】

ご案内の田口会長が「人間の運と不運、とは此の様なものなのか。と深く考えさせられる」そう言つて其の墓地の周辺に漂う、異様な雰囲気

の事を話して下さつた。小道の突き当たる岡の麓、木立に包まれて小さく古い八つ五輪塔が並び、中央に後世の供養塔と思われる大きな宝篋印塔が建つていた。

天文十二年（一五四三年）五月、尼子の富田城攻めに失敗して退却する大内軍に遅れて小早川家の当主、正平は主従僅か八人で鳶巣川を渡る所を、落ち武者狩りの一揆に襲われ非業の最後を遂げた。弱冠二十一才であつた。探訪の会副会長の中村氏が「一緒の兵士は二三百人もいたろうに、何で離れたのか」と嘆いた。

私の思いも同じだが、或いは追撃する敵と戦つていて、主人を先に逃が

したのかも知れない。然し小早川家の不運はそれだけではない。幼少の嗣子繁平は眼病の為失明して家督を継げず、毛利元就の三男隆景を女婿として迎え入れて、小早川氏の男系は絶えた。

不運は未だ続く。隆景は大いに活躍して小早川氏の名声を高めはしたが子孫を残す事が出来ず、豊臣秀吉の甥、秀秋を迎え入れる羽目に追込まれる。その秀秋は「将」としての器に欠け関ヶ原の合戦に土壇場で豊臣方を裏切り、悪評の中で備前、美作五一万石の大名となったが、錯乱の生活の中で、宗祖正平同様二十才の若さで非業の死を遂げ、ここに名実共に名族小早川宗家は断絶したのであった。一六〇二年の事である。

それは多分、八騎塚に眠る正平の怨念なのであろう。彼は血の繋がりの無い人物が家名を継ぐ事を嫌ったのだと私はそう考える。

【山吹城(大森銀山町)】

山城跡の探索こそ備陽史探訪の会の醍醐味なのである。比高二一〇米、爪先登り二十分、其の先にコンクリートの階段が六四〇段続いていた。その道は城跡の北東角に取り付く。突然開けた視界に雑草に覆われた長さ六、七十米、幅十二、三米の長大な郭が二段続き、其の上に広々と

した郭が三段ある。最高所の広場の真中に山吹城跡と陰刻した石柱が建っていた。其の広場が主郭のようだ。

主郭の反対側も段々に下がって、沢山の郭が見える。此の山城の縄張り(基本設計)は北東から南西に郭が連続する連郭式で、一般的な縄張りと言えなが、変っているのは主郭と南側の郭との間に大規模な堀切を設けて連結を絶ち、馬出しと云う嚴重な通路を設置してある点である。

北側は宗徒の家臣達、南側に雇い入れの武士を置いたのであろうか。

主郭からの眺望は三六〇度の絶景で北は日本海がチラリと望め、東は銀山町、東南に間近く有名な仙の山が見える。仙の山頂は昔は銀が自然銀として露出していたのだそうだ。

今年(平成九年)十一月の県博の講座で下津間康夫先生が永禄十一年(一五六八年)にポルトガル人ロードが作成した海図(日本図)には出雲の西に「銀鉱山王国」と記してあって、当時既に世界有数の大鉱山だったと教えてくださった。

山吹城は其の銀鉱山と銀山町を守り、支配する為に築かれた山城なのであるが、何故か此の城は攻められると必ず落城し、守ると必ず敗けると云う不思議な城であった。

試みに探訪の会の資料から抜粋す

ると、銀山の初期は大内氏が管理していたが享禄四年(一五三一年)小笠原長隆、銀山奪取。(以下紀元年で記す)一五三三年大内氏奪回。一五三七年尼子氏奪取。一五三九年大内氏奪取。一五四〇年小笠原長隆奪取一五五一年陶晴賢奪取。五六年毛利氏奪取。一五五八年尼子方、本城常光奪取。此の後本城氏は毛利軍の攻撃を良く守ったが一五六二年、毛利氏は調略に依って(城を預けると約束して)降伏させ、すぐ本城一族を謀殺して山吹城を乗っ取った。

翌一五六三年(永禄六年)毛利氏は銀山を朝廷と幕府に献上し、自らは其の代官となった。

此れに依って山吹城は三十二年間に渡る、血塗られた歴史に終止符を打ったのである。

今、此の山頂に残された数々の郭の跡を廻り歩いて見ると、どうしてあれ程簡単に落城が繰返されたのかと、大きな疑問が湧いてくる。

資料等の説明によると最終的に勝利を得た毛利氏が改築したので有ろうと書いてある。それも有ろうが私には本城常光に注目する。永禄元年(一五五八年)から四年間、毛利軍の数回に渡る大規模の攻撃を撃退したのである。其の守備力は並々ではない。今に残る堅固な縄張りこそ、四年間

を守り抜いた本城常光の原動力であつたと、私は考えている。  
一九九七年一二月

徒歩例会のご案内

芦田町の史跡めぐり

今年 第一回目の徒歩例会は、田口会長と芦田郷土史会の皆さんのご案内で芦田町の史跡を廻ります。

《主な探訪予定地》

- ・国竹城跡、市迫城跡、殿奥城跡等
- ・日 時 平成十年二月十五日
- ・雨天順延(後日、行事案内で連絡)
- ・集合場所 福山駅南口釣人像前
- ・集合時間 午前八時三十分
- ・参加費 五百円
- ・募集定員 先着六十名
- ・申込方法 事務局まで電話

- ・講 師 田口会長
- ・ 又 は は が き
- ・ 一月十二日受け付け開始
- ・ 芦田郷土史会

※現地集合の方は午前九時半に「有磨小学校前」バス停に集合下さい  
※弁当、飲物持参。歩き易い服装でご参加下さい。行程は約七キロ。

# 今日(七日)は何の日

門田幸男

一月七日のテレビで美保関のスミ付け祭りの風景が写されていた。私は、聴力不足で声の解説は聞き取れないが顔にスミを塗られて真つ黒になつても別段腹を立てた様子も見られなかつたから、納得できる何かがあるに違いない。そこで私流の解釈を立てて見ることにする。

スミと云つても書道に使う墨汁ではなくて、ナベ底やカマドのスミを使ったと考えられる。墨も油煙が材料であるから結局、火の燃えかす、即ちススだと思ふ。ススは火生土(灰)の理によつて土氣に属する事になつてゐる。この故にスミを塗られた人は土生金(金銀やその鉱石は土の中から掘り出される理屈)の理によつて金氣の特性堅<sub>レ</sub>健(音が同じ)、言い換えれば無病息災(健康長寿)が与えられる事になる(七赤金氣の七日にやるから最大の効果が得られよう)。

有名な東大寺二月堂のお水取り(旧二月現在は三月)では二月堂の舞台で振り回す松明の火の粉が滝の

ように流れ落ちる光景が印象的だが、この降ってくる火の粉(燃えカス)をつめかけた参拝者が争つて拾うと云う。この土生金(堅即ち健)の利(理)を獲得しようとしているのであるらしい。やつてゐる東大寺二月

堂そのものには土剋水(暴れる水には土堤を築いて對抗する理屈)の理によつて壬癸の水氣の冬の寒氣を遮断する作用を及ぼすと考えられる。俗にお水取りがすまないと本格的な春は来ないと云われる程だから、修二会と呼ぶ仏事であると同時に、春を呼ぶ呪術でもある事を物語つてゐる。

毎夜のお松明の火の粉の雨によつて寒氣が追放された後に二月堂下の若狭井(奈良の都の真北、若狭国の神宮寺では同日お水送りが行われませんが、水が山坂を越えて奈良に送られるはずがなく、水は水氣の北から来るべきものとされる呪術の水でありますから、二月堂下にあつても若狭井と呼ぶ訳である)で汲んだ水が椿(木偏に春と書く故に)の造花が堂内一杯に飾られた二月堂の佛に供えられる事で水生木(春は甲乙の木氣)の理によつて春の氣に満ち、その後水を頂いた参拝者が奈良の都大路に春の氣をふりまきながら、家路につくと云うことになるわけなのだ

と私は理解している。

向こうの方からどうした、七草粥の講釈はやらんのかと、云う声がしているような氣がする(そら耳かも)ので、ご存知とは思ふが、一席申し上げる。

新聞や雑誌でおせち料理に飽きた胃腸にこちち良いなどと解説しているが、とんでもない誤解である。昔の人は飽食等できたはずがない。まづ採つてきた七草をマナ板に乗せて包丁(注①)で叩くのだが次の様な唱え言をする。「七草なずな唐土の鳥が渡らぬ先に」とか、「唐土の鳥と日本の鳥と合わせてバタバタ」などと唱えている(注②)。唐土は日本の西に在り、鳥を西(西・金氣の秋の真盛りの月)と書き換えれば、呪術の心が見えて来る。

七草の七と云う数も九星の七赤金氣(西)の七を用いたのであるらしい。田畑には鳥に奪われるような作物が存在しないこの時季にどうして鳥が追われるのかも西と書き換えることで理解可能となる。七赤金氣の西は金剋木の理(金属刃物で木氣の植物は切り殺される)によつて木氣の作物の成育も又損なわれる理屈となるので正月(旧暦では春の始め)に入ると共に邪魔物は今の内に殺せとばかりに唐土の鳥の代理としての

七草をあげくのはてに食べるのである。これこそ影も無くなる徹底的な殺し方なのである。マナ板の上の七草は単なる野草ではなく唐土の鳥であり金氣の西なのだと思ふ。ここで、七草粥の裏側の意味が見えてくる。回りくどい考え方のように見えるが、金剋殺の迎春呪術は外にもある。

金氣の代表天(六白金氣、注③)の身代わりとして丸くて白くて固い大豆を火熱で殺して木氣の春の到来を妨げる鬼(注④)と名付けて屋外に投げ捨てたり、食べてしまう節分(立春の前夜、注⑤)の行事や大豆をとうふにして焼いて凍らせて煮る等念入りに殺して食べる黒川能で有名になつた扇祭(別名、とうふ祭り、山形県榊引町春日神社・旧正月・現在二月一日催行)などである。テレビ番組では精進料理などと浅い見方しかしていない。吉野民俗学を知らないからである。

注① 又は木の棒  
注② ラジオの放送を録音している。  
注③ 天円地方と云つて天は丸いものとされている。  
注④ 福は勿論五穀豊穰の事  
注⑤ 伊勢の神鳥では大晦日に行うが、節分と同じ春になる前夜である。

# 大原から鞍馬への旅

石井しおり

十一月二十三日、初冬の巷に紅葉折り敷くの大原から鞍馬、貴船への旅に出る。

待望のその朝は、またとない小春日和、好天と普段の行いの良いのを結び付けて、互いに褒め合いながら京都に着く。直ちにバスにて大原へ直行、次第に多くなる人の波と団体バスに翻弄され通して三千院に到着。

午前八時福山苑から只今丁度十一時半である。茶店に腰をおろして名物の山菜御飯を頂く。店を出て、小さな魚山橋を渡り、参旨の石段を上がる道も、息苦しいまでの人の群れが押し合う。

阿弥陀三尊を拝みやつとお庭に出ると、秋の日にエメラルドのような彩りの杉苔が、目の前いっぱいに広がる。子供地藏さんが数体、苔の中から半分姿を現わして、可愛らしさに微笑んでしまった。

三千院から少し山道を登ると、来迎院に入る。僧正円仁さまが中国から持ち帰られた「天台声明」の発祥の寺であるという。この仏教音楽は、

その後の日本民謡、謡曲、歌舞伎等に、大きな影響を与えたといわれている。

来迎院から再び三千院の前に戻り右に行くとき実光院の玄関が見えてくる。ここの風情のある作庭に、秋から翌年春まで咲き続けるという「不断桜」という名の名木が立っていた。現実、初冬の風に揺れる桜の花びらが、カメラの放列を浴びている。

次は宝泉院、富士山の形に見える大きな五葉の松があり、樹齢もさぞやと思わせる太い幹がピンク色で、生気漲るのちに驚いてしまった。

やがて鄙びた野辺を辿り辿るほどに、小高い丘につづく石段の上に、品良く小さな佇まいの寂光院が、現われてきた。

平家物語や謡曲でわが胸の奥に描いていたそのままが、一幅の絵のようになっている。

晴れ渡る洛北の空と杜を背に、朱に輝く柿の点描の中で、楚々と立つその姿は、何という美しさ優雅さである。幾世を越えてきた史実の重さであるうか。

そしてその姿と、今の時代のいくさや、もろもろの悲しみを重ね合わせ、諸行無常の思いを深くする。

すではや五時半、寂光院と地続きの大原山荘に旅装を解く。

露天風呂ありの案内板にうれしくなつて、石造りの階を登る。

まだあたりに人影はなく、夕陽が紅葉を透き通してキラめかせ、野趣そのもの、朦朧の湯気に包まれたわが身は、自然の中へ溶け込んでしまった。

夕食はぼたん鍋、そのおいしいこと、はるばるやってきた甲斐ありと大いにメートルを上げる。

二十四日朝八時過ぎ、大原山荘出発。江文時を越え静原を歩く。それは昔ながらの風情が残る野辺の道であった。

やがて鞍馬の町に入り、狭い軒並にも在りし日の面影が漂っている。

仁王門を潜り、由岐神社に突き当たる。ここより九九折の急坂を曲がって、やつと鞍馬寺へ。

義経が遮那王と呼ばれていた幼い頃、修業に励んだ石くれの山坂はこんなだと、その昔、五条大橋で、大兵の弁慶を手玉に取った稚児姿の牛若丸を思い浮かべ、感無量であった。

急峻なこの細い山道に加え、昼なお暗く天を突くばかりの杉木立、名も知らぬ鳥がするどく啼いて空気をひき裂く、天狗も、物の怪も、さまよっているかもと、瞬間、背筋に冷たいものが走る。

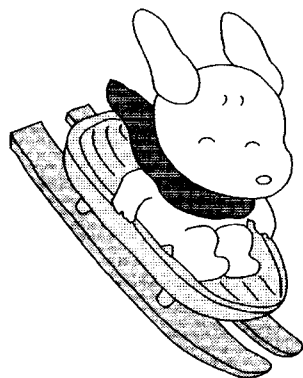
義経の「背比べ石」を左に「木の根道」に足を取られて転びつつ降りて行くと、木の間蔭れに清々しい川音が聞こえてくる。貴船川の瀬音なのだ。

やつと下界へ、貴船神社の前に立つ、そこは京の先斗町を思わせる艶な家並が続き、紅堤灯が揺れていた。ここは、水神さまとも、縁結びの神ともいわれ、石段の両側には朱塗りの献灯がびつしり並んでいる。

興に乗って「おみくじ」を引き、社務所の前の献水盤に浸すと、無地であった料紙に「時を待てば恋は成就する」と幻のごとくご宣託が現われた。

あな、畏

今から八百年の昔を偲んで歩む大原、鞍馬、貴船の旅路は、高い杉木立を仰ぎつつ、そのかみの大自然の生気をそのまま享受したような、のびのびと幸せな二日間であった。



# 「記・紀」歌謡のとりえ方

ついで

佐藤壽夫

私たちが知っている「古事記」「日本書紀」のなかには多くの歌が読み込まれています。

たとえば、「記・紀」の応仁天皇（品陀和氣オホシメノキミ 菅田別尊）の項に、大雀命（後の仁徳天皇）が、父王が召して後宮にいられた、日向国ノ諸県君の女、髪長比売をゆずり受けて、自分の妃にするくだりで挿入歌が記されている。

応仁天皇は「日向国に髪長比売という美しい女がいるときいて、専使（特別の使いをする者）を遣わして髪長比売を召した。ところが皇太子の大雀命が姫が難波津に泊まったのを見て、建内宿禰大臣に天皇が召した髪長比売がとても気に入ったので、私の下さいと伝えてくれるように頼んでもらった。天皇も皇子が髪長比売を、みそめていると知って二人を娶わせようと思ひ、後宮において催された宴席に髪長比売を招いた。その席で、天皇が皇子を手招いて髪長比売を指し示して詠んだのが

次の歌である。

「古事記歌謡」Ⅱ《訳注》

伊邪古杼母 怒毘流都美迹

比流都美邇 和賀由久美知能

迦具波斯 波那多知婆那波

本都延波 登理韋賀良斯

志豆延波 比登登理賀良斯

美都具理能 那迦都延能

本都毛理 阿迦良袁登賣袁

伊邪佐佐婆 余良斯那（四四）

いざ子ども 野蒜摘みに

蒜摘みに 我が行く道の

香ぐはし 花橘は

上枝は 鳥居枯らし

下枝は 人取り枯らし

三つ栗の 中つ枝の

ほつもり 赤ら嬢子を

いざささば 良らしな

現代語訳

さあ若者たちよ、野蒜を摘みに行く。香のよい花橘は、上の枝のは、鳥がとまってなくなり、下の枝のは、人が取ってなくなり、中の枝には、実が花蕾に含みこもっている。その実のような紅顔の少女を、さあ自分のものにしたら良い。

さて、この歌の内容は何を物語っているのでしょうか？ 何か謎めいた意味が含まれているのであろうか。歌そのものに、どのような意味が含まれているのか、疑問をもつ歌謡である。

ところで、もう一つの歴史書「日本書紀」を見てみると、この歌は次のように記されている。

（従来の解説）

いざ吾君 野の蒜摘みに。  
蒜摘みに 我が行く道に、  
香ぐはし 花橘、  
下枝らは 人皆取りて、  
上枝は 鳥居枯らし、  
三栗の 中枝の、  
ふほごもり、  
あかれる嬢子。  
いざささばえな。

（現代語訳）

さあ、わが皇子。野に蒜摘みに出かけよう。いつも私が蒜摘みに通いながら道には、香りも色も素晴らしい花橘が咲いていてね。下の枝に咲く花は、人がみんな取ってしまい、上の枝は、来てとまる鳥が枯らしてしまい、三栗の（中）のほどよい枝だけには、ういういしい蕾をつけているけれど、その花の蕾のように目のさめるほど美しい娘さんがいるよ。  
その娘が花のように咲くといいいね。

いや、チンプンカンプン意味が理解できませんね。この歌は、前に述べたように、応仁一三年春三月、あべた人が「日向国に、髪長媛と称する娘がおり、国色の美女といわしめるほど美貌です」と天皇に申し上げた。そこで、天皇は彼女を呼び寄せようとして使者を送った。大鷲鶴尊が彼女を見初めその美貌に強く心を動かされ、深い恋に落ちてしまう。天皇は皇太子の彼女に対する思いを叶えてやろうと思ひ、二人を娶わせようとする。天皇は後宮において催された宴席の席に、髪長媛を招いた。その席で、天皇が太子を手招いて髪長媛を差し示して詠んだのがこの歌で

ある。

この歌は、応神天皇が髪長媛の觀相を通して、口の大きい特徴と女性の陰門とを結びつけ、谷間の深いことを想像して、比喩的に聞かせているところが、特に興味深いと解説せられるのは、韓国の文学博士、金仁培氏である。

たとえば、農耕社会的な用語の数々、谷(溝)、畑の畝、溝を掘り水を引き入れる(流す)、カレ(鋤)農機具)、それから草が生い茂る丘(陰毛の生えている部分の特徴)などの言葉を使使して、巧妙な隠喩をしてみせている。

『日本書紀』の本文の記事内容からみて、父と子の間の密やかな囁き合いを想像させる。原文の、『(天皇が)大鷦鷯尊を手招きし、髪長媛を指して詠んだ』という言葉が、このことを裏付けている。

金氏は、そのほかに、見過ごすことのできないのは、借用された漢字の数々が、歌のイメージを想像させるのに大きな役割を果たしている点であると言われる。たとえば、重ねて出てくる文字が、一つの詩歌の中においては必ず同一の音や訓で読ませるように一貫性を維持している、とも述べられている。しかし、全体的な内容から少し不自然になつてい

る部分もないではないともいわれる。

さて、金仁培博士の解説によつて、この歌を読み取る前に少し予備知識を学んで戴きたい。この解説は、当時の古代朝鮮で使用された「吏読文」いどむん」という文章表現で行なう。「吏読」というのは、古代朝鮮の人が漢字を借り、その音訓を活用して朝鮮語を表記した借字文である。そして、驚くことは、「記・紀・万葉集」なども、この吏読文で書かれた多くの部分がある。とくに「記・紀」の本文には、「音よみせよ」と注をつけた句節は、ほとんど例外なく古代朝鮮語で書かれているということである。

このように書かれた「記・紀」を読む場合、「吏読風」と、とくに「風」の文字をつけて話されるのは、韓国女流文学者の、李寧熙(イニヒ)女史である。日本式の訓を混用、朝鮮語と日本語をとりまぜて表記しているところに加えて、漢文体語句まで使用しているの、実に複雑多様な表現方法になつていると李女史はいわれる。

私たちもこれから「記、紀、万葉集」を読む場合これらの文体を、理解して学ぶことも必要ではないだろうか。では、金氏が解説せられたこの歌を見てみよう。

【真の意味】

(原詩) 伊奘阿芸怒珥 口の大きい子に谷間ありそう。

比蘆菟眉珥 谷間(溝)を耕すとき(鋤をいれるとき)特に水が流れこみそう。

比蘆菟瀾珥 谷間を耕せば水が溢れるだろう。

和餓噓区瀾智珥 なぜあんなに喜ぶのか、水、溢ればかりに

伽遇破志波那多 行って、会い、流れそうになり

智磨(麼) 那辞豆曳羅 自惚れの結果そうなるのだ。

波比等未那 溢れる谷の水渴き

等利保菟曳波等利 田を耕し水を張りかえるときのように

委餓羅辞瀾菟遇 任せてくれるので水を湛えるように逢い

利能那伽菟曳能 それは、溝を耕していくように水を曳きこむのだね。

府保語茂利 谷見れば叢生い茂っているだろう

阿伽例蘆場等咩 丘、鋤で耕す時

伊奘佐伽麼曳那 口の大きいあの子と行って、寝るだろうか。

(意味) 口の大きいこの娘の人相からさつして、すっかり大人なんだろうね。女性自身もすでに成熟していそうだね。その溝に挿入するとき特に潤うことだろう、挿入すれば潤うどころか溢れるかもしれない。

どうしてそんなに喜ぶのかな。溢れんばかりに、行きなさい。会えば(枕を共にすればはば)、お互いに満足

のいくセックスができるだろうよ。自分の容姿に自身をもっているから。はじめからうまくいくのさ。

(水田の)水が干あがれば、新たに水を張る(灌漑)ようにやさしくしてあげれば、全く安心して身を任せられるから、潤うようにしてあげなさい。それは、溝を耕し、水を曳きこむような要領でやるのさ。谷間にそつと目をやつてごらん。茂みがあるだろうよ。丘を鋤で耕すとき、敵いたりするように、そつとふれてみなさい。

さあ、口の大きいあの子と、行つて枕を共にしてごらん。

金氏の解説いかがだろうか。このあとの「日本書紀歌謡・第三十六」の大鷓鴣尊(仁徳天皇)作の歌も解説してみると、開けてびっくり、この歌も隠喩的表現であるものの、それはセックスの歌であったと、金氏は言われる。そして、続く「日本書紀歌謡・三十七、三十八」も、大鷓鴣尊の髪長媛に対するセックスの歌であるらしい。

「道のしりり……」も興味深々な歌であるが、また、次の機会にしたいと思う。

では、「日本書紀歌謡・三十六」大鷓鴣尊作(古典文学全集)の歌を見よう。

瀧豆多摩蘆 予佐瀧能伊戒珥  
奴那波区利 破陪鷄区辞羅珥

委遇比菟区 伽破摩多曳能  
比辞餓羅能 佐辞鷄区辞羅珥  
阿餓許居呂辞 伊夜于古珥辞氏  
(ふりがなは訓読)

【従来の解説】  
水淳る 依綱池に 尊繰り  
延へけらく知らに  
堰杙築く 川俣江の、  
菱茎の さしけく知らに  
吾が心し いや愚にして。

【現代語訳】

「水淳る」依綱池に生えている、ぬるぬるした縄のような蓴菜をたぐり寄せてみると、意外と水面下に茎がどこまでも延びていました。これまでは気がつかず、また池の堤が崩れぬよう杭を打ち固めて、川から分かれた入江の菱の茎が、ずつと以前からどンドン延び広がっていたのにも気づかず、私は全く愚かでした。

なんと幼稚な現代語訳でしょうか。大鷓鴣尊後の仁徳天皇はこのように歌を詠んだのではなく、皇太子は髪長媛と男女の営みをした後に応神天皇に答歌したのです。

【真の訓み下し文】

瀧豆 (原詩) 水溢れんばかりの

多摩蘆 予 佐 花瓶を前にため  
蘆 能伊戒珥 一枝さすのも心  
奴那波区利 破 陪 それでも水  
鷄区辞羅珥 鶏の鳴き声を耳にし  
委 遇比菟 少し萎縮し  
区伽破 摩多曳能 茄子を一度ひ  
比辞餓羅 能 心まよいまた勃起  
佐辞鷄区辞羅 珥 しきりに鶏が  
阿餓許居呂辞 ああ勃起してしま  
伊夜于古珥 辞氏 この夜、ゆき  
挿し果てた。

(意味)

水もしたたるような、女性を前にしてためらい、やさしく挿入したのに、初体験の痛み(出血)はかくしきれず、痛みをうったえる声を聞いたので、一瞬のためらいで、萎えてしまい、一度は性器を抜いてはみたものの、心ままならぬままに勃起し少し声が高くなったのは求めているからかと胸高まり、今度こそ本格的

に勃起してしまい、ついにこの夜、性を尽くし果てた。

(全体の流れ)

このように、この歌は、応神天皇が皇太子に髪長媛を降しながら、男女の営み(交合)を農耕社会の特徴に例えて、敵と敵との間を耕し水を引き込む行為を以て歌い上げた「日本書紀歌謡・第三十五」に対する答歌です。答歌に相応しく、姫を水で満たすと湛えた生け花用の器に水盤または花瓶のように、自分はそれに差し込む花のついている枝に喩えている。

応神天皇が女性の口の大きな形状から溝も深いであろうと連想し、交接する際の状況を敵間に水が注がれて行く様子に例えたように、皇太子は女性を溢れんばかりの水を湛えた水瓶に例えている。

即ち第一句において「水いっぱい器に入れて行く際、ためらつて」といったのは、今まさに端々しく熟成しかけた女性に相対するときは、そのような注意深く扱いながら、自分のものとして抱いていくという態度の表現であり、応神天皇が歌のなかに髪長媛がすでに大人の女性(伊契……)と言ったのに答えている。

第二句で「水がいっぱいだから乱



暴にせず用心して」とあるのは、表面上は用心深く水を満々と湛えた水瓶に枝を差し込むという穏やかな表現だが、実は初体験の女性の痛みを和らげながら挿入するという隠喩なのである。「戒」の用字法がその裏付けをしている。漢字自体の意味にしても「やんわりと女性の気持ちをや

わらげながら(戒、慎也)注意深く慎重に(戒、慎也)差し込んでいく(珥・挿入也)となる。しかも、韓国語の訓読みである「サムガキウ」の発音は「慎重に挿む」の意味は勿論、「注意深く差し込む」の意味まで同時に含まれている。即ち「珥」の訓読みは「キウ」であるが、これは韓国語の「挿む:キウンダ」という意味と同時に、「やるよ:ハルコヨ」の語尾である曖昧な発音「コヨ」と方言「キウ」の発音は、ほぼ一致するからである。このような点から見て、これらの歌は韓国語の発音を生かすための吏読式漢字表記であることは疑う余地がない。

第三句において「ノモナ フルリ チジョヨッタラ」といったのは全体の文脈の流れ(表面的内容)からみると、たいへん注意深く花つきの枝を差し込んだけれど、水が溢れ流れてしまったという意味であり、敗れたということは、窄めた口がひ

らくように花の蕾が割れて花や葉が咲いたという意味にいったんは解釈できる。

しかし、これもやはり一つの修辞的隠喩法に過ぎない。既にこの歌が明らかに性愛を表現しているからには、この句こそ初めて経験する交合行為の必然的な過程を暗示しているものである。「破」の字の解釈において、あえて「破れて」と解いたことがそれを示している。「破」は、その外にも「割れ・壊れ・裂け:」などの意味をもつ。したがって、この句の本来の解き方は「溢れ流れて、割れた:現代語へノムチヨナフルリ、ケジドランで、「水瓶(女性)の底が割れて水が溢れ流れる」ともとれる。多少無理な表現も含まれるが交

接行為を暗示した表現であることは違いなく、これを裏付ける根拠として「陪」の用字法がある。この文字の訓の中に「次の(式也、副也、次也)」があり、この語の韓国語「ボグム(次の)」は、やはり韓国語で「隙または穴がはつきりと大きく空いている状態」を表す擬態副詞「ボクム」と酷似していて、意図的にこの文字を選んで使用したものと思われる。このような奇抜な用字法に留意しながら調べていくと、第三句以下の句が何を意味しているのかは、これ以

上説明しなくても明確になるはずである。

夜明けの鶏が鳴く頃、花が萎えていくように、水瓶から引きずりだした花のついた枝が「ピサコラッタ:…ふらつき勃起してしまった」というのは、性行為における興奮と戸惑いの巧みな表現であることは言うまでもない。露骨な性行為の歌であるにも拘わらず、この歌の内容は全くといっていいほど低俗な感じを与えていない。

そのわけは、男女間の交接を表現するにあたって、直截的な方法をさけ、両性を象徴する関わりのあるものを引用して、これを隠喩化することで、迂回的表現を通じて文学的イメージへと昇華させたその卓越性によるものである。

これに対し従来の解説は高尚めいてはいるものの一体何をいいたいのか漠然としている。不必要な美辞麗句の小枝を切り取ってすっきりした幹だけにすると、次のような意味になろうかと思う。

つまり、「天皇が遠い将来まで気を使っているのに気付かず、また、ちよど菱の根が遠いところまで延びていつているが如く、私の遠い将来まで配慮して下さったことを知らず、私は愚かであった」という意味

になる。

結局、日本の定説になっている解釈と校注者の訳注を読むと、この歌の要旨は「天皇が髪長媛を下賜しようとして配慮しているのも知らず」大鶴鶴尊が「私にもつぱら愚かであった」と自分の愚鈍さを嘆いている歌ぐらいの意味になっている。

このような解釈が全面的な間違いであることは『日本書紀』の本文の記事をよく読めば、すぐに判明するはずである。即ち、この歌は応神天皇が詠んだ歌に対する答歌として、のちの、仁徳天皇⇨大鶴鶴尊が詠まれたものであるが、この歌のやりとりの状況説明によつて、その点は明らかになる。

金仁培文学博士は、やはり「記・紀・万葉集」の古代歌謡は、古代朝鮮語で書かれているといわれる。また、「もう一つの万葉集」を書かれた、李寧熙女史も金博士と同じ学説の吏読式で読むと「記・紀・万葉集」の古代歌謡は解説できるいわれる。

おわりに、正史になぜこのような歌が載せられたのか不思議である。当時の宮廷は実はおおらかであり平和であったのかもしれない、過去を覗きみたい思いがする。

※参考文献

- 「記・紀・万葉集の解説通信」
- 「もう一つの万葉集」
- 「古事記」倉野憲司 校注
- 「日本書紀」日本古典文学全集

地頭について

木下和司

中世の武士達と切っても切れない関係を持つ言葉に「地頭」がある。鎌倉時代後期の成立と言われている「沙汰未練書」(沙汰とは鎌倉幕府の訴訟制度を指し、未練は未だ練れずだから、幕府訴訟手続きの入門書のこと)には、

「地頭トハ、右大將家以来代々將軍家に奉公し御恩を蒙りし人の事也」とある。これだけでは「地頭」が何なのかは解らない。鎌倉時代、地頭となった武士達は御家人とも呼ばれているから、同じく「沙汰未練書」で「御家人」を引いてみると、「御家人トハ、往昔以来の開発領主（かいはつりょうしゅ）為り。武家の御下文賜う人の事也」とある。ここにいう御下文は、所謂「地頭」補任状を指しているから、鎌倉幕府から地頭に任命された武士(開発領主) 御家人ということになる。一例として源頼朝が島津忠久に充てた地頭補任状を見てみよう。

頼朝 (花押)  
下 伊勢国波出御尉  
補任 地頭職事

左兵衛尉惟宗忠久

右件所者故出羽守平信兼党類領也而信兼依發謀反令追討畢仍任先例為令勤仕公役所地頭職也早為彼職可致沙汰之状如件以下

元暦二年六月十五日

【読み下し】

下す 伊勢国波出御尉  
補任す 地頭職の事

左兵衛尉惟宗忠久

右、件の所は故出羽守平信兼党類の領也。しかるに信兼謀反をおこすに依り追討せしめ畢んぬ。仍て先例に任せて公役を勤仕せしめんがために、地頭職に補する所也、早く彼の職として沙汰致すべきの状件の如し、以て下す

元暦二年六月十五日

この補任状から中世の武士達は鎌倉幕府から「地頭職」(じとうしき)という職分に補任されることに依つて初めて、荘園内で地頭として公役を勤める資格を得ることになる。では本稿の主題である地頭とは、どのような職分や権利を持つものな

のであろうか。これを具体的に説明している文書は、見つけられていない。ただわずかに前述の「沙汰未練書」にこんな一節がある。

一、新補地頭トハ、承久兵乱の時、没収の地を以て所領等に宛賜う事也。地頭得分率法は事書き在り

一、本新両様所務事。向様兼帯の所務トハ、本補地頭として下地を一円管領の上、又新補率法の得分を取る。これを向様兼帯と云う也。地頭に其の咎有り。

きる取り分を言う。つまり、荘園に於ける「新補地頭」の取り分は、新補率法に定められてたことになる。

また、二つ目の文書から鎌倉時代には、「本補地頭」が新補率法に基づいて得分をとる「両様兼帯」(その逆も)が、非法とされていたことが分かる。では、本補地頭の得分はどのように定められていたのだろうか。これについても、幕府の法令が残っている。宝治元年(一二四七)十二月八日の御教書によれば、

「本(補)地頭は所務の先例有り、新(補)地頭は率法を守るべきのよし、前々下知を加え畢んぬ」

とあり、本補地頭の「所務」は先例を守って行うべしと書かれている。ここでいう「所務」とは本来は職務の事である。中世には荘園での所職や所領の管理を意味し、その所職に伴なう「得分」をも意味していた。

では、「本補地頭」の先例とは、何を指しているのだろうか。関係する文書を更に探してみると、前の宝治元年の御教書に関連して建長五年(一二五三)十月に六波羅探題北条長時に宛てた御教書にその解説を見ることが出来る。その御教書には、「本地頭に補せられるの輩、本司の例に背き武威を募り巧みに無道を

張行致し云々。甚だ以て自由也。地頭職を賜うといえども、なんぞ旧古の由緒に背き領家国司の所務を妨せしむべけんや」

とある。簡単に要約すると「本補地頭」は、「本司」の先例に基づいてその職務を行うべきだとしている。前出の「沙汰未練書」によれば、「本司」とは「地頭補任以前の領主也」と書かれている。地頭以前の在地領主は、その土地を開発した領主という意味で開発（かいほつ）領主と呼ばれた。平安時代末期、地方の開発領主たちは武士団を形成していた。彼等は、国衙から所領に対して受ける圧力を嫌って、土地の管理権を留保してその所領を中央の貴族や社寺に寄進し、自分自身はその所領の「下司」となる道を選んだ。つまり開発領主たる武士団の棟梁達が前出の「本司」に当たるわけである。

また、「本司」の所務の先例として前の建長五年十月の御教書に更に詳しい記述がある。それは、

「但し、本司の跡に於いては、郷保に随い莊園に依つて、所務は各々別なり。一樣にあらざれば、或いは開発領掌の地と為すに依つて、本年貢を備進せしむるの外、総領の下地に於いては一向本司これを進退す。或いは自名知行の外、総

領の地本を相綺わずの所これ多し云々。」

とある。つまり、この文書は地頭が所領とする郷・保・莊園によって地頭の所務(職務の内容・得分)は別々であると述べている。自身が開発領主である場合や、開発領主の跡に地頭として補任された場合は、その所領の土地に対して強力な支配権を持つている。しかし、それ以外の場合には、地頭は、地頭名以外の土地に対して支配権を持っていなかった事が多かったようである。

これで私が以前から「地頭職」に対して持っていた疑問の一つが解消された。以前から地頭制度に興味を持っていた私は、いろいろな地頭に對してその「地頭職」の中味を調べたことがある。でも「地頭職」の中味として統一的な共通点を見い出すことはできなかった。その原因は、地頭の所務が、所領の成立事情によって異なっていたためであった。

次に、「新補地頭」の得分である「新補率法」の内容はどのようなものだろうか。これについても鎌倉幕府の法令が残っている。貞応二年(一二二二)六月十五日の御教書に依れば、

「田畠各拾一町の内、十町を領家国司分、一町を地頭分として広博狭

小をいとわずこの率法以て免(田)を給するの上、加徴を段別五升充行われるべし」

とされている。つまり「新補地頭」は、田畠十一町毎に對して一町の地頭給田と段別五升の加徴米を与えられている。しかし、この新補率法は承久の乱以後に補任された全ての地頭に適用された訳ではない。前の御教書の地頭得分条に於いて、以前から將軍家の下知状を帯せる地頭の關所跡に補任された新地頭の得分は、旧例に従うべきとしている。また、本司跡の得分無き所に於いては「新補率法」に従って得点を定めるとしている。

以上の考察から「地頭職」の内容は、所領となる郷・保・莊園の事情によって異なっている事が分かる。また、地頭補任以前に下司等の所務の先例がある場合は、その先例に従って得点が定められていた。所務の先例が無い場合にのみ「新補率法」によってその得点が定められていたことになる。

【参考文献】

※「沙汰未練書」

「続群書類従」巻第七百四所収

※「地頭及び地頭領主制の研究」

安田元久著

※「中世法制史料集

第一巻 幕府鎌倉法」

佐藤進一・池内義貧編

城郭研究部会からのお知らせ

尾越城跡測量調査

城郭研究部会では左記の要領で瀬戸町尾越城跡の測量調査を実施致します。中世山城に興味のある方、ぜひご参加下さい。

《実施要項》

- ・日 時 二月二十二日
- ・集合時間 午前九時
- ・集合場所 草戸町明王院駐車場
- ・その他

弁当、飲み物は各自で持参して下さい。歩き易く汚れても良い服装でご参加下さい。

会報の原稿募集

会報八二号の原稿を募集します。原稿は「一行十六字×二〇行」でちょうど一ページです。以下三行毎に一段になります。原稿は二ページ以内(厳守)でお願いします。四百字詰め原稿用紙を使用する場合は下四字分を空白にして、一行十六字にして書いて下さい。

# 黒塚古墳と三角縁神獸鏡

平田 恵彦

黒塚古墳は奈良県天理市柳本町に所在する全長約一三〇mの前方後円墳です。先ごろ新聞で報じられたように、発掘調査でこの古墳から画文帯神獸鏡一面、三角縁神獸鏡三二面、刀剣類、工具類、土師器等の多数の遺物が出土しました。とくに三角縁神獸鏡の出土量は圧倒的で、有名な京都府の椿井大塚山古墳と並ぶものです。

ただ椿井大塚山の場合、旧国鉄の線路工事のさい盗掘を受け、その後回収されたので出土状況がよく分かっていなかったのですが、黒塚の場合は学術調査なので三角縁神獸鏡が古墳においてどのように使われていたかを示す貴重な史料になりました。

今回の銅鏡の出土状況を見ると、三角縁神獸鏡より画文帯神獸鏡（平縁・中国鏡）の方が重要視されています。帯神獸鏡が棺内の遺体の頭部に立てられていたのに対し、三角縁神獸鏡は棺外に、反射面を内向きにして棺を囲むように立て並べられていたからです。報道によると、邪気を払う目的があったのではないかとこの

とですが、私もそう思います。

三角縁神獸鏡は初期ヤマト王権が連合の証として、地方首長に配布された最も重要な鏡とされています。

これは椿井大塚山古墳を頂点とした同範鏡（同型鏡）の分布から小林行雄さん（京都大学教授、故人）が提唱した仮説で、現在定説化しています。しかしこれまで、肝心のヤマト王権の中心地である桜井市・天理市周辺からは三角縁神獸鏡があまり出土せず、この仮説の弱みといわれています。今回の発見はこれを払拭するものでしたが、新たな疑問も出てきました。

それが、先に示した黒塚古墳における鏡の配置です。繰り返しになりますが、ここでは三角縁神獸鏡は呪物として使われているようで、死者の権力の象徴となるのはどうやら平縁の画文帯神獸鏡のようなのです。

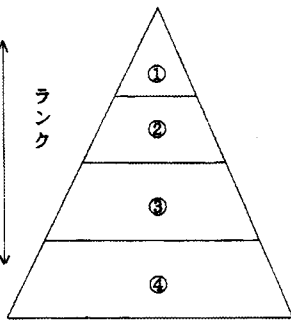
三角縁神獸鏡が最重要だという説の背景には、卑弥呼が魏からもらった「銅鏡百枚」はこの鏡であり、初期ヤマト王権は邪馬台国の末裔だという暗黙の前提があります。

しかし、よく知られているように、三角縁神獸鏡は中国大陸・朝鮮半島から一枚も出土しません。三角縁神獸鏡はすべて日本製であるという説もあり、定説も含めてもう一度見直

す必要があるようです。

滋賀県立大学教授の菅谷文則さんは以前から、三角縁神獸鏡はそれほど重要な鏡ではなかった、といっています。菅谷さんは古墳時代の鏡を大きく四つに分類し、三角縁神獸鏡は上から三番目のランクだといいます。左図を見てください。

三角形（ヒエラルキー）の下部から上部へ向けてランクが上がります。④は倭鏡（大型、三角縁神獸鏡を含めて明らかに日本で作られた鏡）、③は船載の三角縁神獸鏡（大型、中国製だとされている）、②は中国鏡（小型・中型、内行花文鏡や平縁の神獸鏡など）、①は特別に作られた希少な倭鏡（超大型、佐味田宝塚古墳出土の国宝家屋文鏡や柳井茶臼山古墳出土の夕龍鏡など）です。



わかりやすくいえば、鏡の重要度は出土例が少ないほど増すというこ

とです。三角縁神獸鏡の出土数はす

でに四百面を越え、古墳時代の鏡の全出土数の三分の一近くを占めます。つまりありふれた鏡であり、それほど重要ではなかったというのです。

菅谷説の可否はともかく、黒塚古墳の出土状況からこういう説はこれからはもっと出てくると思います。

菅谷さんはもう一つおもしろい視点を提出しています。黒塚古墳には葺石と埴輪がなく、王権の中心地にある古墳としては特異だといわれています。この周辺は柳本古墳群といい、行灯山古墳（崇神陵）、渋谷向山古墳（景行陵）など前期の前方後円墳の大密集地です。そのいずれもが葺石・埴輪をもっているのです。

今は樹木が繁茂しているのですがよくわかりませんが、葺石のある古墳は築造当時は巨大な白い石の山でした。それに対し、葺石のない古墳は赤茶けた山です。菅谷さんは、白いワイシャツを来た何十人もの人の中に、ぼつんと一人だけ丸裸の人が立っているようなもので、当時はたいへん目立つたはずだ、といっています。葺石のない前期の重要古墳は、他に桜井茶臼山古墳と椿井大塚山古墳があり、そのいずれもが大量の鏡を副葬していたのは決して偶然ではない、というのが菅谷さんの考えです。

# 平成一〇年度総会開催

# 備陽史探訪の会役員改選

# 平成10年度会報・ 行事案内発送計画

# 新入会員紹介

一月二五日(日)午後四時半から、福山市の遺族会館で平成一〇年度備陽史探訪の会総会が開催されました。冒頭、田口会長が挨拶をし、今年度も活動をいっそう充実させていく決意を披露しました。

続いて石森啓吾さんを議長に選出して議事へ。平成九年度活動報告、同決算報告、同監査報告と続き、いずれも承認されました。続いて会則改正、役員改選、平成一〇年度活動計画、同予算案が発表され、すべて承認されました。議長解任後、午後五時四〇分終了しました。

会則の改正は、今回役員として新たに「評議員」を設けることに伴ったもので、部分改正です。評議員は各部会から選出し、会の運営について意見を出してもらおう方々です。これは会員数が三百名に迫り、より充実した会の運営を行なうには、役員の拡充が必要と判断したためです。また、現会則は会員数が十数名の時制定されたもので、実情にあわない部分が出てきたため、来年度総会において全面改正の予定で、現在原案を討議中です。

なお、総会で承認された主な内容は次ページから掲載いたします。

総会において新役員(任期二年)が次のように決定されました。

名誉会長 神谷和孝  
 会長 田口義之  
 副会長 山口哲晶、中村勲史  
 馬屋原亨

参与 中西晃、末森清司、後藤匡史  
 佐藤洋一、種本実、棗田英夫  
 柿本光明、広川茂夫

事務局長 平田恵彦  
 事務局員 佐藤秀子、佐藤錦士  
 寺崎久徳、木下和司  
 三好勝芳、塩出基久

(歴史民俗研究部会)  
 部長 神谷和孝 副 平田恵彦  
 評議員 石井良枝、佐藤壽夫

(古墳研究部会)  
 部長 山口哲晶 副 網本善光  
 評議員 七森義人、篠原芳秀

(城郭研究部会)  
 部長 出内博都  
 副部長 杉原道彦、小林浩二

評議員 黒木日出人、坂本敏夫  
 高端辰巳

★監査委員 藤井忠夫、杉原外志子 (留任)

☆退任 事務局長 七森義人  
 事務局員 日野雅友  
 長い間ご苦勞様でした。

1/1(土) 行事案内 (事務局による発送作業)

2/7(土) 会報81号 (事務局による発送作業)

3/14(土) 行事案内 (古事記)を読む終了後作業

4/11(土) 会報82号 (古事記)を読む終了後作業

5/16(土) 行事案内と「山城志」16号 (中世を読む)終了後作業

6/13(土) 会報83号 (古事記)を読む終了後作業

7/11(土) 行事案内 (古事記)を読む終了後作業

8/8(土) 会報84号 (古事記)を読む終了後作業

9/12(土) 行事案内 (古事記)を読む終了後作業

10/17(土) 会報85号 (中世を読む)終了後作業

11/14(土) 行事案内 (古事記)を読む終了後作業

12/19(土) 会報86号 (中世を読む)終了後作業

☆以上はあくまでも予定です。都合により日程を変更する場合がありますのでご了承ください。

CONFIDENTIAL  
 備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため掲載できません。

## 平成9年度活動報告

### 郷土史講座・特別講演会

日程	講座内容	講師	会場	参加数
1/26(日)	総会記念講座 『福山の文化財』	池田一彦	遺族会館	52名
2/22(土)	第2回郷土史講座 『杉原氏と山手銀山城』	木下和司	福山市民会館会議室	52名
3/29(土)	第3回郷土史講座 『毛利元就と備後の国人』	田口義之	中央公民館	80名
4/26(土)	第4回郷土史講座 『備後南部の終末期古墳』	網本善光	中央公民館	26名
5/31(土)	第5回郷土史講座 『備南の磐座信仰』	平田恵彦	市民会館	40名
6/28(土)	第6回郷土史講座 『応仁文明期の山内首藤氏』	出内博都	中央公民館	30名
7/13(土)	特別郷土史講座 『中世の山城について』	本田 昇	広島県立歴史博物館講堂	約180名
8/30(土)	第8回郷土史講座 『芦田川上流域の後期古墳』	山口哲晶	市民会館	39名
9/28(日)	第9回郷土史講座 『応仁以後の備後の争乱』	小林浩二	中央公民館	53名
10/25(土)	第10回郷土史講座 『系図から歴史を読む』	杉原道彦	中央公民館	30名
11/29(土)	第11回郷土史講座 『河内町の薬師城跡について』	篠原芳秀	福山市民会館会議室	33名
12/13(土)	特別郷土史講座 『中世港湾遺跡の成果について』	佐藤昭嗣	中央公民館	45名

### バス・徒歩例会・古墳巡り・一泊旅行

日程	行事内容	講師	参加数
3/16(日)	特別企画 高瀬川-「元就ゆかりの水軍城を訪ねて」	歴史民俗資料館と共催	110名
3/23(日)	徒歩例会 『山手銀山城に登る』	城郭部会	73名
4/13(日)	バス例会 『毛利元就の史跡めぐり-吉田郡山城に登る-』	田口義之	98名
5/5(日祝)	第15回親子の古墳巡り 『駅家町の古墳を歩こう』	山口・網本・篠原	約70名
6/1(日)	バス例会 『広島北部の史跡めぐり』	歴史研	46名
9/21(日)	秋の古墳めぐり 『世羅台地の古墳めぐり』	山口・網本	48名
10/11・12(土日)	一泊旅行 『出雲・石見の旅』	旅行委員	41名
11/16(日)	徒歩例会 『瀬戸町の史跡めぐり』	田口・出内	60名
12/7(日)	バス例会 『庄原雲井城登山会』	城郭部会	47名

### 定期講座

①毎月第1土曜日	『古墳講座Ⅳ』	古墳研究部会	山口・網本	現地学習会
②毎月第2土曜日	『古事記』を読む	歴史民俗研究部会	神谷・平田	中央公民館
③毎月第3土曜日	『備後古城記』を読む	城郭研究部会	出内博都	中央公民館・市民会館

## 《城郭研究部会活動報告》

- ①月例研究会「中世を読む会」原則として第3土曜日午後7時から。中央公民館で開催。  
『備後古城記』を読む。一書精読。毎回10名～18名が参加。
- ②郷土史講座担当 市民会館・中央公民館会議室で開催。
- |                                  |                |
|----------------------------------|----------------|
| 2/22(土) 第2回郷土史講座『杉原氏と山手銀山城』      | 木下和司 福山市民会館会議室 |
| 6/28(土) 第6回郷土史講座『応仁文明期の山内首藤氏』    | 出内博都 中央公民館     |
| 9/28(日) 第8回郷土史講座『応仁以後の備後の争乱』     | 小林浩二 中央公民館     |
| 11/29(土) 第10回郷土史講座『河内町の薬師城跡について』 | 篠原芳秀 福山市民会館会議室 |
- ③バス例会 12/7(日)『庄原雲井城登山会』④徒歩例会 3/16(日)『山手銀山城に登る』  
⑤山城測量調査 3/9 湯舟城(芦田町)参加11名。

## 《古墳研究部会活動報告》

- ①第15回「親と子の古墳巡り」5/5担当。  
駅家町の古墳(北塚古墳、大迫金環塚古墳、権現塚古墳、宝塚古墳、狐塚古墳、二子塚古墳)
- ②郷土史講座担当
- |                         |              |
|-------------------------|--------------|
| 4/26(土)『吉備の南部の後期古墳について』 | 網本善光 中央公民館   |
| 8/30(土)『芦田川城領域の古墳について』  | 山口哲品 市民会館会議室 |
- ③第9回秋の古墳巡り『世羅台地の後期古墳』担当(11/10)。  
御調町歴史民俗資料館、沼城、康徳寺古墳、神田1号古墳、近成山古墳などをめぐる。
- ④「古墳講座Ⅳ」毎月第1土曜日 網本・山口 中央公民館 毎回8名～15名が参加。  
野外講座を中心として実施(夏季は室内にて講座を開く)。
- (1)潮崎山古墳(2)曾根田白塚古墳(3)尾市古墳、加茂倉田遺跡  
(4)足長古墳、神辺町歴史民俗資料館、迫山古墳群(5)笠岡郷土館、関戸廃寺、長福寺裏山古墳群(6)藁江古墳群(7)長波古墳、戸田1号古墳、松本古墳
- ⑤掛迫6号古墳測量調査報告書作成の継続  
各項目の設定及び執筆分担表に基づき原稿依頼、現在収集中。

## 《歴史民俗研究部会活動報告》

- ①郷土史講座担当 中央公民館会議室
- |                              |            |
|------------------------------|------------|
| 3/29(土) 第3回郷土史講座『毛利元就と備後』    | 田口義之 中央公民館 |
| 5/31(土) 第5回郷土史講座『備南の磐座信仰』    | 平田恵彦 中央公民館 |
| 10/25(土) 第9回郷土史講座『系図から歴史を読む』 | 杉原道彦 中央公民館 |
- ②バス例会 6/1(日)『広島北部の史跡めぐり』 平田恵彦
- ③毎月第2土曜日 『古事記』を読む 毎回15名～25名が参加 中央公民館会議室
- ④加茂町石像物分布調査の継続 11月～12月の第2日曜日に実施。
- ⑤現地学習会の実施 『吉備磐座紀行』参加16名

平成9年度支出入決算報告

勘定項目	収入額	摘 要	勘定項目	支出額	摘 要
会 費	732,500	261名(22組)	会報印刷費	271,420	
	3,000×213=639,000		行事業内等印刷費	12,242	会員名簿印刷含む
	1,500× 1= 1,500		『山城志』印刷費	360,000	会報復刻版含む
	1,000× 2= 2,000		通信費	340,580	切手代等
	2,000× 1= 2,000		部会活動費	63,551	古墳石造物調査費等
	4,000× 22= 88,000		講師料等	111,500	講師宿泊・交通費含む
書籍等販売収入	260,780	『山城志』販売含む	事務費等	57,209	事務費等
雑収入	302,477	例会収入・寄付等	広告費	10,300	
銀行利息	4,785		諸会費	58,000	
以上計	1,300,542		別途積立金	200,000	
前期繰越金	429,301		次期繰越金	245,041	
総 計	1,729,843		総 計	1,729,843	

監査の結果、上記の通り相違ないことを承認します。

監査委員 藤井忠夫、杉原外志子(印)

平成10年度予算(1月25日総会で承認)

収入の部			支出の部	
項 目	予算額	摘 要	項 目	予算額
会費収入	730,000	3000円×210人 4000円× 25組	『山城志』印刷費	300,000
			会報『備陽史探訪』印刷費	270,000
			行事業内等印刷費	20,000
雑収入	450,000	例会収入・書籍販売等	郵送・通信費	350,000
繰越金	245,041		部会活動費	100,000
			事務局費	50,000
			一般経費・諸費用	200,000
			掛迫報告書代	100,000
			予備費	35,041
総 計	1,425,041		総 計	1,425,041

\* 別途に特別積立金500,000円があります。



## 平成10年度活動計画

日程	講座内容	講師	会場
1/25(日)	総会記念講座 『備後有地氏の盛衰』	田口義之	遺族会館
2/28(土)	第2回郷土史講座 『邪馬台国時代の吉備と出雲』	網本善光	福山市民図書館
3/28(土)	第3回郷土史講座 『備後の式内社について』	平田恵彦	市民会館
4/25(土)	第4回郷土史講座 『太田庄地頭三善氏について』	木下和司	中央公民館
5/30(土)	第5回郷土史講座 『戦国大名としての毛利氏-毛利元就は戦国大名か?-』	出内博都	中央公民館
6/27(土)	第6回郷土史講座 『題未定』	柿本光明	中央公民館
7/25(土)	特別郷土史講座 『題未定-秋の古墳巡りに関係して-』	山口哲晶	中央公民館
8/22(土)	第8回郷土史講座 『他界は何処-古墳文化の本質を探る-』	辰巳和弘	広島県立歴史博物館講堂
9/26(土)	第9回郷土史講座 『題未定』	石井良枝	中央公民館
10/31(土)	第10回郷土史講座 『題未定』	七森義人	中央公民館
11/28(土)	第11回郷土史講座 『岩成庄と正藤山城について』	坂本敏夫	中央公民館
12/12(土)	特別郷土史講座 『題未定』	県立歴史博物館学芸員	中央公民館

☆都合により日程・会場が変更になる場合があります。

### バス・徒歩例会・古墳巡り・一泊旅行

日程	行事内容	講師
2/15(日)	徒歩例会 『芦田町の史跡めぐり』	田口・芦田郷土史会
3/29(日)	バス例会 『雲井城・甲山城に登る』	城郭部会
4/19(日)	バス例会 『西大寺・牛窓の史跡めぐり』	歴史研
5/5(火・祝)	徒歩例会 第16回親子の古墳巡り 『金江町の古墳を歩こう』	古墳部会
6/7(日)	バス例会 『未定』	田口・木下
9/20(日)	バス例会 『秋の古墳めぐり 陶棺の謎にせまる-瀬山の古墳めぐり-』	古墳部会
10/17・18(土日)	一泊旅行 『但馬・丹後の史跡巡り』	旅行委員
11/15(日)	バス例会 『国史跡 高山城に登る』	城郭部会
12/6(日)	徒歩例会 『新市町の史跡めぐり』	田口・瀬引郷土史会

☆都合により日程・コースが変更になる場合があります。

### 定期講座

①毎月第1土曜日	『古墳講座Ⅳ』	古墳研究部会	網本善光	中央公民館
②毎月第2土曜日	『古事記』を読む	歴史民俗研究部会	神谷・平田	中央公民館・市民会館
③毎月第3土曜日	『備後古城記』を読む	城郭研究部会	出内博都	中央公民館

☆都合により会場・時間が変更になる場合があります。

## 《城郭研究部会活動計画》

- ①月例研究会「中世を読む会」 第3土曜日午後7時から。中央公民館で開催。  
『備後古城記』を読む。今年も継続してやっていく。
- ②郷土史講座担当
- |   |      |       |
|---|------|-------|
| 1/25(日) 総会記念講座 『備後有地氏の盛衰』                   | 田口義之 | 遺族会館  |
| 4/25(土) 第4回郷土史講座 『太田庄地頭三善氏について』             | 木下和司 | 中央公民館 |
| 5/30(土) 第5回郷土史講座 『戦国大名としての毛利氏-毛利元就は戦国大名か?-』 | 出内博都 | 中央公民館 |
| 11/28(土) 第11回郷土史講座 『岩成庄と正藤山城について』           | 坂本敏夫 | 中央公民館 |
- ③山城調査実施 例会下見などを通じて簡単な測量したいと思っている。
- ④バス例会担当 3/29(日) 『雲井城・甲山城に登る』・11/15(日) 『国史跡 高山城に登る』
- ⑤徒歩例会担当 4/12(日) 『三原桜山城に登る』
- ⑥山城測量調査 2/22(日) 尾越城(瀬戸町)

## 《古墳研究部会活動計画》

- ①掛迫6号古墳測量調査報告書の作成  
昨年果たせなかった報告書を3月いっぱいまでに完成させたい。
- ②第18回「親子の古墳巡り」5/5担当  
松永湾岸の古墳(葉江古墳群)をめぐる。福山市との共催に。
- ③郷土史講座担当
- |                                   |      |         |
|-----------------------------------|------|---------|
| 2/28(土) 第2回郷土史講座 『邪馬台国時代の吉備と出雲』   | 網本善光 | 福山市民図書館 |
| 7/25(土) 特別郷土史講座 『題未定-秋の古墳巡りに関して-』 | 山口哲晶 | 中央公民館   |
- ④第10回「秋の古墳巡り」担当 『陶棺の謎にせまる-瀬山の古墳めぐり-』
- ⑤「古墳講座Ⅴ」毎月第1土曜日  
本年度も原則として現地の古墳の探訪を実施し、野外学習会を実施します。  
すでに1月11日(日)「備前車塚古墳」の見学会を実施。

## 《歴史民俗研究部会活動計画》

- ①郷土史講座担当
- |                               |      |       |
|-------------------------------|------|-------|
| 3/28(土) 第3回郷土史講座 『備後の式内社について』 | 平田恵彦 | 中央公民館 |
| 6/27(土) 第6回郷土史講座 『題未定』        | 柿本光明 | 中央公民館 |
- ②バス例会担当 4/25(日) 『西大寺・牛窓の史跡めぐり』 神谷・平田
- ③毎月第2土曜日 『古事記』を読む 中央公民館会議室  
最大は達成したので最強を目指して今年もしっかりとやっていきたい。
- ④加茂町の石造物分布調査  
3月から引き続き調査を継続する。来年には報告書出せるようにしたい。
- ⑤現地学習会 秋に『吉備の磐座紀行Ⅱ』を予定している。

# 深津市の栄枯盛衰 えびすさんはいま琴平におわす

柿本光明

深津市は現在の福山市蔵王町の一部の地名であった。福山市と合併する(昭和三十一年)までは深津郡市村とっていた。村名の起りは当時その地区は山陽道でも有名な深津の市があり、かつて盛大に交易をしていたことに因むもので、「市」と称したのはずいぶん早くから当地が開けたことも証拠づけるものである。

「備陽六郡志」に「往古海蔵寺という寺あり。当村の生土八幡は海蔵寺の鎮守なりしとぞ。則海蔵寺の跡は八幡の境内にありて礎今に残れり」とある。

この伝海蔵寺跡は、昭和四四年に「宮の前廢寺」として、国の史跡指定を受けている。この時の調査によると、この寺は奈良時代の前期から中期に金堂が建てられ、その後、三重と思しき塔が建てられたという。昭和五年に宮の前廢寺を発見された早稲田大学の西村眞次博士の「日本古代市場の研究」に、代表的な古代市場が紹介されている。

まず、大和の市場は寧楽(藤原京)である。都にあり、文化の中心だったからだ。また、「記紀」に名を残

し、古代から栄えている市場としては高市・軽市(撰津)、餌香市(河内)などがある。奈良時代では地方市場として阿部市(駿河)、小川市(三野)があげられ、深津市(備後)も載っている。

海蔵寺の門前に、いつの頃とはなしに、各地から綿や布や塩や馬などが集められ、遠く四国の讃岐などからも海産物を持ち込まれて交易されていたという。これが深津の市であった。この門前市は当時、大変賑わっていたことがうかがえる。

平安時代の初期、奈良薬師寺の僧景戒によって撰録された仏教説話集「日本霊異記」に備後の深津の市のことが出ている。

「光仁天皇の御代の宝龜九年(七七八)の冬十二月備後国葦田の郡大山の里の人、品知牧人が正月のものを買おうと、同国の深津郡深津の市に向かっていた。道の途中で日が暮れた。そこで葦田の郡の葦田の竹藪に泊まった。すると野宿している所あたりから声がして、「目が痛い」といっている。牧人はこの声を聞き、一晚中眠ら

ずにうずくまっていた。明くる朝、見ると一つの鬻(とく)があった。(中略)その鬻は人間の姿になって

「わたしは葦田の郡屋穴国の穴君の弟公です。盜賊の叔父秋丸に殺されたものです(後略)」と告げた。

(中略)盜賊秋丸は、すべて凶星で心中恐ろしくなつて、もはや隠すこともできずに白状した。「去年の十二月下旬、正月元日の物を買おうと、わたしは弟公をいっしょに市に連れて行きました。弟公が持つて行った物は、馬・布・綿・塩などでした。途中、日が暮れ、竹藪に泊まり、こっそり弟公を殺して、その持ち物を奪い取り、深津の市に行つて馬は讃岐の国の人に売り、その他の物は時おり出して用いています」といった」

この「日本霊異記」に「正月の物を買はむが為」に深津の市に出かけるなどと記述されているとおり、深津市は古くから栄えた有名な市場であった。

南は海上三五キロの彼方、四国の讃岐より、北は約三〇キロもある芦田・府中方面から多くの人たちが、この海蔵寺門前の深津市に集まり、盛んに交易をしていたのである。そのためか、今でも「宿」―市場に

来た人々が泊まったところか―、「馬宿」―馬を留めたところだろうか―などの地名が残っている。「備陽六郡志」の「宿の夷」の項に「宿」という字あり、昔牛馬の市たちたる所あり、そこに胡の社ありて神鉢は伽羅にて刻たる壹尺餘の像なりしが(略)」とある。

また「西備名区」の今宿の項には、「元祿の頃まで小さき町がありて牛馬互市せり。胡の社ありしが、神鉢伽羅木にて作れるなり(略)」と記載されている。

えびす(恵比須、戎、恵比寿)とは、古くは豊漁の神、後は七福神の一人として、生業を守り、福をもたらす神とされており、狩衣・指貫・風折烏帽子をつけ、右手わきに鯛をかかえている。土地の人、市場に来る人たちも、この御神鉢を商売の神として拝み、市場の繁栄を祈り続けていたであろう。

海が深く湾入した奥にある船着き場であったので深津と称していた深津湾も、時が立つに従い、海退現象も手伝って市場近くまで入っていた海もだんだん浅くなつていった。

たとえば、元和五年(一六一九)大和郡山の城主から備後・備中九郡十萬石の領主に封じられた水野日向守勝成も、備後神辺城に入るのに、まず輦に着き、そこから田尻に移り、

そこから小舟に乗り移って市村の網木に舟をつけ、ここから上陸して神辺に向かったといわれている。

このように浅くなった深津湾は、海から市場への海産物の搬入も讃岐との取り引きもできなくなり、だんだんさびれ衰微していったという。

なお、市村沖が干拓されたのは、水野美作守勝重（後の勝俊）が国許総奉行、神谷治部・小場兵左衛門に命じて一六四三（寛永二〇）から始められたものである。

ともかく、往古あれだけ栄えた門前の深津市が、平安時代後期（？）の海蔵寺金堂焼失、次いで塔崩壊により、徐々に衰微していったのか、それとも海退現象により、船の出入りが困難になったため衰えたのか、いろいろと考えさせられた。

ところで、前述の「備陽六郡志」の続きに

「それを讃岐に盗まれ、その跡に地蔵を建置されり。件の胡、金毘羅の市中に勧請す。是より金毘羅、弥増に繁昌するといへり。胡を盗まれたは元禄の頃のことなり」とあり、また「西備名区」にも「これを元禄年中に盗賊奪い去りて讃州に沽却せり、今金毘羅山の下町の胡はなりと云」とある。私はこの両文献をよく読んでいた

のだが、伽羅木の胡が盗まれ、金毘羅山の下町の町にあるということには、つい最近までそれほど気に留めていなかった。しかし、「備陽六郡志」に

「件の胡、金毘羅の市中に勧請す。是より金毘羅、弥増に繁昌するといへり」とあるように、あるいは、この伽羅木の胡の盗難が深津市の衰微の遠因となったのではないか、とも思え、また、胡さんのその後も気になったので、讃岐の金毘羅山（琴平町）を探訪してみることにした。

岡山からJR瀬戸大橋戦線に乗り換え、土讃線を経て琴平駅に下りる。右に高灯籠を見ながら鳥居をくぐって大宮橋を渡り、参道を左に折れる。さらに、両側に商店の並ぶ神明町を通って左に折れる。だが、一ノ橋を渡り、新町商店街から旧高松街道まで歩いても件の胡が見当たらないので、琴平駅の東裏にある琴平町役場

（教育委員会）を訪ねることにした。教育委員会では、ちょうどいま町史編纂を行なっているとのこと、その担当者に合わせてくれた。その際、深津市にあった伽羅木で作られた胡が金毘羅に勧請された胡であるという記事（「備陽六郡志」と「西備名区」のコピー）を見せ、この胡を探していると話すと一瞬驚いて、「実は琴平町のこの胡はいつどこで

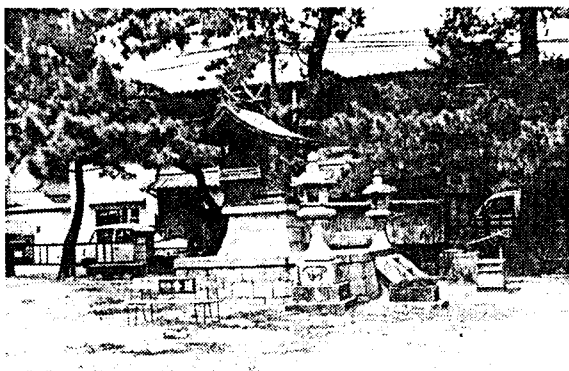
作られたかを調査していたところ、この胡は町内の神事場というところにあります」と教えてくれた。

町役場を後にし、線路づたいに琴平高校の前を左に折れ、線路を渡って今橋の手前を左に行くと、約一分で神事場にたどり着く。神事場の西側を流れる金倉川には、橋柱がなく、屋根のある珍しい橋が架かっている。これを渡って通町を通り、七八五段の石段を登ると金刀比羅宮に辿り着く。この神事場（広場）の中に二、三の社がある。その一つが目的の胡社であった。

琴平町教育委員会で、この胡社について次のような資料をいただいた。「えびす社  
阿波町神事場内に建っている。このえびすさん（おいべっさん）はもと南新町に祀られていたものである。」

文久元年（一八六一）九月、新町から南新町に抜ける道の西側、東向きに祀られた。これは万延元年（一八六〇）この辺りに魚会所が出来たためである。その後、元治元年（一八六四）阿波町神事場に移し奉ったものである。祭礼は毎年夏、行なわれている。世話役は阿波町の有志が大勢それに当たっている。

なお、神殿の前の石灯籠は、阿波町、片原町と昔の阿波街道名を刻んでおり、奉納の年は、寛延三年（一七五〇）である」



神事場のおいべっさん

ところが、「備陽六郡志」「西備名区」ともに、盗まれたのは元禄年間（一六八八〜一七〇三）と伝えてるので、琴平の町に奉納されたのは、仮に石灯籠が奉納された寛延三年（一七五〇）としても、五、六十年の誤差がある。しかしそれは、盗んできたものをすぐに祀るというのではなく、どこかに隠しておいて時期をみて祀ったということもできるのではないだろうか。

社殿の鍵を開けてもらい、中の御神鉢を拝観させていただくと、正しく私の頭の中に描いていた胡さんにそっくりである。紫檀ともいえようか、黒檀ともいえようか、埃をかぶって黒煤けたした御神鉢を手にしてみても、ずっしりとした重みに身の引き締まる感動を覚えた。

これが、あの遠き昔、備後国深津市の弥栄えていた時、町の片隅に御座した胡さんである。盗まれたというが、勧請されるもする。時代の流れは移り変わり、琴平は栄え、市村は衰微したことは、まさに栄枯盛衰を物語るものである。

### 『古事記』を読む

#### 〔実施要項〕

日程 二月二日(土)

★今月は会場の都合により第三土曜日に変更します。ご注意ください。三月はいつも通りです。

三月一四日(土)

時間 午後二時から

場所 中央公民館(会議室)

講師 神谷和孝さん(名譽会長)

平田恵彦さん(副部会長)

テキスト代 一〇〇〇円(岩波文庫ワイド版『古事記』を使用)。

資料代 そのつど一〇〇円程度。

### 古墳講座Ⅴ

#### 加茂造山古墳見学会

加茂造山古墳は古墳時代中期の巨大な前方後円墳。墳長は約三六〇m、後円部の径が二二四mあり、全国第四位の規模。最近、埴輪が発見され、注目を浴びています。

#### 〔実施要項〕

〔日 程〕三月七日(土)

〔集合時刻〕午後一時三〇分

〔集合場所〕福山駅北口

「福山キャッスルホテル前」

#### 〔見学場所〕

造山古墳(岡山市新庄下)と陪塚。

吉備路考古館(風土記の丘内)

〔募集数〕限定一五名

〔参加費〕実費(一五〇〇円程度)

★会員のクルマに分乗。クルマを出し、高速代を分乗した他の三人で分担。資料代・保険料を含みます。考古館の入館料は各自の負担です。

〔その他〕歩きやすい服装と運動靴でご参加下さい(弁当は不要です)。

〔受付〕山口古墳部会長宅まで。

〔電話〕〇八四九一四五―六一七三

★クルマの準備がありますので必ず電話して下さい。

〔受付期間〕三月一日(日)～三日(火)

午後八時～九時(時間厳守)

### 〔路傍の文化財〕

#### 街道に眠る馬の供養塔と俚謡『藪路天神坂馬殺し』

出内博都

福山市千田町藪路から奈良津町に越す旧山陽道の北麓、三軒屋集落の街道脇に四国八十八ヶ所地藏が祀られている。そのお地藏さんに寄り添うように、馬像を刻んだ小さな石碑が立っている。三軒屋集落の南端に近いK化学工業の西手から南へ百数十メートルの間に四基の供養塔がある(次ページ別図参照)。

福山に築城され、城下町が形成されてから、横尾から三軒屋土手ができ、大峠を越え、胡町の惣門にいたる道が、広い後背地から城下へのメインストリートになった。その場合、地形的にみて千田・横尾が水陸の要衝である。すでに「元禄検地御水帳」には藩宮渡船場や水主屋敷もあり、横尾には十数件の商家が存在したことが知られる。在郷町横尾が経済的に発展したことは、幕末の「千田宝講」の設立や「福山藩義倉」の設立者河合周兵衛の活躍などによって知ることが出来る。

舟と馬である。芦田川の舟便も利用されたであろうが、城下町の中心地港町の位置からみて、最短距離は藪路・大峠道である。正徳年間(一七一―一七一六)に三軒屋土手が築かれたとき、この道はかなり改修されたとは思いますが、もともと現国道大峠の西側山中に「塞の神」が祀られていることからみても、かなりの急坂であったことは容易に想像がつく。ここに「藪路天神坂馬殺し……」の俚謡が生まれる要因があったのであろう。

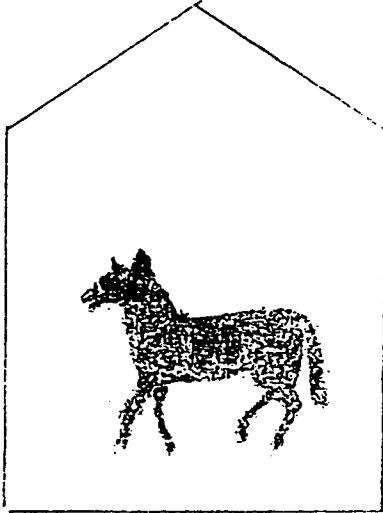
こうした情勢の中で、千田・横尾が後背地から大消費地福山への物資搬入の集散地になったことは当然であろう。当時、物資の輸送というと

千田の地籍図によると、「孫才」という地名がある。これは現在まで続いている(現在の公民館「元の役場、小学校付近」)。この地名の由来は人名ともみられるが、「まご」という発音から最も端的に思い出されるのは「馬子」という言葉である。さらに「さい」という語については「宰領」という語から転化したのではないだろうか。

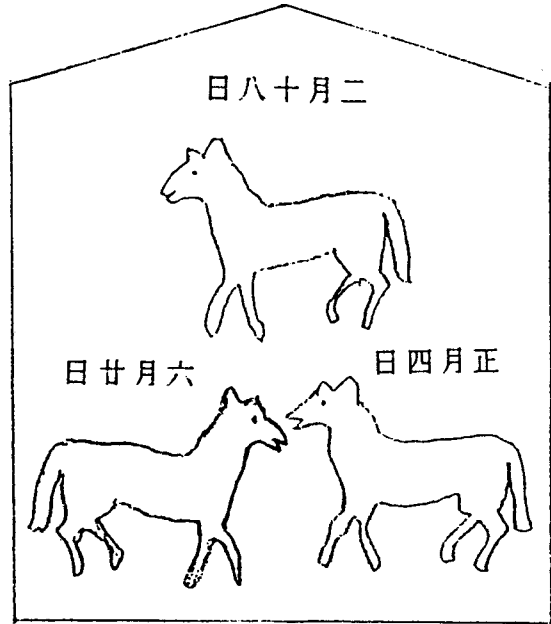
小学館の国語辞典によれば、宰領という語の解釈の一つに「宰領 才領。中世以降、荷物を運送する駄馬や人夫をひきつれ、その指揮、監督、

# 千田藪路天神坂馬供養碑 (1:5)

(馬像は1号碑の馬の拓本である)



[1号碑] 25 × 33

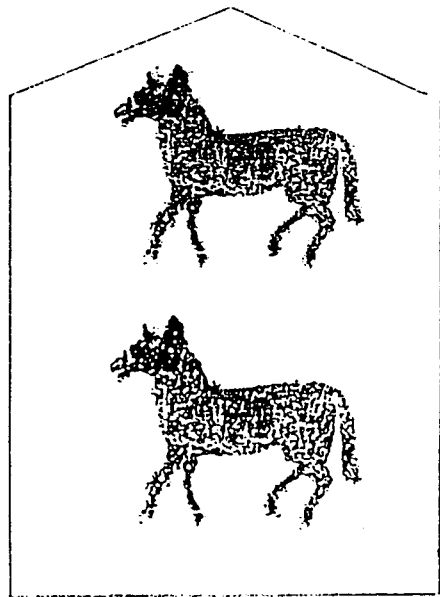


[2号碑] 35 × 40

馬像は陰刻(線彫)



[3号碑] 27 × 40



[4号碑] 28 × 40

護衛にあたること。また、その役」という解説がなされている。かなりしっかりとした馬子の集団管理施設、その管理人および物資の保管・配分の総合施設が考えられる。現代流に言えば、「トラクターミナル」とでもいえようか。ここから「馬子宰」が生まれ、その転化が「孫才」となったのではないだろうか。

【福山志料】によれば、深津郡の牛馬の頭数は「牛 八四〇頭、馬 一四六頭」である。農耕用の家畜としては、東国は馬、西国は牛というのが一般的である。この地方では、馬は交通・輸送のためのものであった。馬が村に十頭以上いる村は、市村十三頭、引野村十三頭、坪生村十五頭、吉田村十三頭、千田村十八頭、中津原村十五頭などである。これを見ると、みな街道筋の村々である。千田が頭数が最も多いのも「馬子宰」という施設があったためではないだろうか。

荷馬車は昭和初期まで物資輸送のかなりの部分を占めていた。福山から三十余キロ奥の私の郷里で、昼過ぎに休息中の馬車の小父さんに、馬の「かいば（飼料）」として葛葉かずらの葉をホボロ（さる）につめて持っていき、鉛玉などをもたらった牧歌的な記憶が甦ってくる。そのとき馬車

の小父さんが「横尾から来た」といった言葉が思い出される。福山市内を馬車で歩くのものはばかられて、横尾あたりが馬車荷の集散地だったようである。これも近世の「馬子宰」の伝統があったからであろう。

一日に何回か通う天神坂の急坂、馬の消耗も激しかったであろう。こうして共に生活を闘った相場を偲んだ人々の思いが、この小さな碑の素朴な馬像ににじみ出ているように思われる。

今はすっかり脇道に変わった三軒屋の道路も、かつては山陽道のメインストリートとして賑わった日もあった。こうした変遷をこれらの碑はどう眺めているだろう。栄光の山陽道の貴重な文化財である。

中世を読む

『備後古城記』

【実施要項】

- 日時 二月二日(土) 午後七時
- 三月二日(土) 午後七時
- 場所 中央公民館会議室
- テキスト代 一〇〇〇円
- 座長 出内博都さん (既購入者不要)
- 資料代 一〇〇円程度 (城郭部会部会長)

事務局日誌

- ▽二月六日(土) 古墳講座V「発掘された日本列島97」見学会。参加一五名。
- ▽二月一三日(土・昼) 特別郷土史講座「中世港湾遺跡の調査成果について」講師佐藤昭嗣 広島県立歴史博物館主任学芸員。参加五三名。内容充実よかった。
- ▽二月一三日(土・夜) 忘年会。参加四六名。全体的な行事では最後の集会。全員無礼講で飲みまくる。末森さんがわざわざ近江からかけつけてくれた。
- ▽二月二〇日(土・昼) 「古事記」を読む。参加一七名。
- 「ああ今年も終わったかと胸撫でる」
- ▽二月二〇日(土・夜) 「備後古城記」を読む。参加一五名。本当に平成九年度最後の行事です。
- ▽一月一〇日(土) 新年最初の行事がこれ。古墳講座V「備前車塚古墳」登山会。参加一五名。ちょうど前日に黒塚古墳で大量の鏡が発見され、グッドタイミングになる。
- ▽一月一〇日(土) 同じく新春初の行事です。ハイ。「古事記」を読む。参加一三名。古墳部会と行事が重なり、かなりの人数がそつちへ流れる。ブンブン!
- ▽一月一日(日) 末森さんが三原市立図書館主催の講演会「国史跡 高山城II」の講師を務める。会員が大挙して押し寄せ会場は超満員に。
- ▽一月一日(日) 城郭部会の主催で「新春桜山城登山会」を実施するも、「天は我を見放したか!」の涙雨。やむなく中止、四月に順延となる。雨の中一縷の望みをもって待ち続けた四十人近くの方、申し訳ありませんでした。
- ▽一月一七日(土) 「備後古城記」を読む。参加一五名。
- ▽一月二五日(日) 郷土史講座「備後有地氏の盛衰」参加八三名、講師田口義之会長。於福山遺族会館。会場は超満員。資料が足らずにコピーに走る。
- ▽一月二五日(日) 四時半から総会。参加七五名。これだけ多くの方が総会に出席下さったのは初めて。於福山遺族会館。
- ▽一月二五日(日) 新年会。参加六八名。ひたすら飲んで語る。これ、備陽史探訪の会の伝統。於福山遺族会館。
- ★講座などの会場は特に断わりがない場合はすべて中央公民館。

第二回郷土史講座

邪馬台国時代の吉備と出雲

邪馬台国時代は弥生時代後期の末、つまり三世紀初頭から中葉ころまでを指しますが、卑弥呼とその宗女台与が活躍した時代といったほうが分かりやすいでしょう。三世紀末になると、ヤマトに巨大な著墓古墳が築造されて古墳時代に入るので、まさにその直前の時代にあたります。この邪馬台国時代は、現在の西日本が四つの大きな文化圏・政治圏、すなわち「畿内」「吉備」「出雲」「北九州」に分かれていたようなのです。そのうち出雲と吉備は後の古墳につながらず、大きな盛土をもつ墓(墳丘墓)を造る独自の文化をもっていました。出雲は四隅が突出した糸巻形の墓を造り、吉備は後の埴輪につながる特殊器台・特殊壺を作り、墳丘の上にすえて祭祀をしていました。

ところで、出雲市にある西谷三号墓は四隅突出型墳丘墓として最大級の規模の誇りますが、その墳丘上に出雲系土器に混じって何故か吉備の特殊器台が置かれていました。つまりこの時期、吉備と出雲は何らかの政治的なつながりがあったのです。しかし、しばらく後にこれが跡絶えてしまします。そして出雲では消滅した吉備の特殊器台が、突如としてヤマトの発生期の古墳―著墓・西殿塚・中山大塚・弁天塚―の墳丘上に現れるのです。この吉備の特殊器台の動きは邪馬台国時代の何らかの政治的変動を表わしているように思われます。

今回、網本さんにはこの大きな謎に挑戦していただきます。

《実施要項》

《日時》二月二十八日(土)午後二時

《場所》福山市民図書館会議室

★都合により会場が変更になりま

した。ご注意ください。

《講師》網本善光さん

(古墳部会副部長)

《資料代》一〇〇円程度

訃報

松岡 正(まっおかたし)さん

一月三十一日(土)午後九時四分、入院先の共済病院で肺ガンのため逝去されました。享年七十二歳。

昨年十一月一日、一緒に鳥取の梶山古墳の見学に出かけたときにはとてもお元気で、その時、春ままだどこかに行こうと約束をしたばかりでした。とても信じられません。心よりご冥福をお祈りします。

第三回郷土史講座

備後の式内社について

式内社とは「延喜式」神名帳に記載されている神社のことで、全国で三三三三座(神)、二八六一社あります。これら式内社は少なくとも平安時代以前より祭祀が始まっていたことが明確な神社で、言い換えればとても由緒のある神社だということです。

しかし、式内社の中には、祭祀が現在まで連続と続くものもあれば、その所在地さえまったく分からなくなっているものもあります。

私たちの住む備後の式内社は一七座・一七社あります。その中には、たとえば、沼名前神社や天別豊姫神社など有名な神社もありますが、比古佐須伎神社などそれほど名前の知られていない神社もあります。

三月の郷土史講座では「備後の式内社」と題して、その所在地、祭神、社名の由来、沿革などを平田歴史研副部長にお話いただきます。

《実施要項》

《日時》三月二十八日(土)午後二時

《場所》市民会館

《講師》平田彦彦さん

(歴史研副部長)

《資料代》一〇〇円程度

加茂町石造物分布調査再開

しばらくお休みしていた加茂町の石造物分布調査をこの三月から再開します。今回は調査範囲を広げて下加茂地域を中心に調査します。日程等は以下のとおりですので、奮ってご参加ください。

《実施要項》

日 程 三月八日(日)

三月二十二日(日)

四月二十六日(日)

集合時間 午前一〇時

(終了予定は午後三時半頃です)

集合場所 賀茂神社(加茂町芦原)

その他 弁当・飲物持参。山歩きのできる服装・靴で参加のこと。

《編集後記》

新年第一号の会報です。今回は二人で別々に編集したのですが、相互の連絡があまりうまくいかず、編集に手間取ってしまいました。しかし、掲載された文章はいずれも充実しています。よくご賞味くださいネ。

(警座亭主人・遵行使節沙弥)

備陽史探訪の会事務局 ☎七〇〇八四

福山市多治米町五一一九一八

☎〇八四九(五三)六一五七